

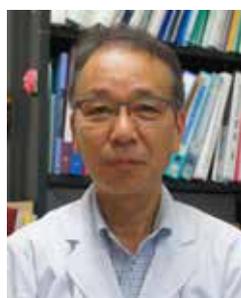
Vascular Street



福岡大学医学部とタイ国コンケン大学医学部間の 国際交流と研究セミナー



後左から：Supat Sinawat 先生、Witoon Prasertcharoensuk 先生、Pewpan Maleewong 先生、
吉村芳修先生、Supinda Koonmee 先生、名和行文先生、名和先生奥様
前左から：右田啓介先生、Charnchai Panthongviriyakul 医学部長、朔啓二郎医学部長、
鍋島一樹先生、自見至郎先生



レポーター：
福岡大学医学部病態構造系総研
講師 自見 至郎 先生

Khon Kaen University (KKU: コンケン大学)

コンケン大学は、バンコクから北東へ約400kmの内陸部に位置するコンケン県ムア
ンコンケン郡(市)にあり、地平線がどこまでも続く平野の中に位置している。人
口約40万人の市には特に目立った産業や観光地はなく、大学町となっている。コ
ンケンの気候は、熱帯性モンスーン気候で、季節は雨季と乾期の二つに分かれて
いる。雨季は5月中旬から9月までで、インド洋からの湿った空気を含む南西季節
風が吹き、乾季は11月から4月までで、乾いた北西季節風が吹く。訪問時は乾季に
入ったばかりで、最高気温30度程度、最低気温20度程度で、日蔭は涼しく、そよ吹
く風は心地よかった。ちなみに、乾期終盤の3月から5月上旬は酷暑期で気温が40
度に達することがしばしばあり、訪問・観光には適さない。

コンケン大学は1964年にタイ東北部に最初に設立された国立大学で、周辺地域か
ら多くの優秀な学生が集まる。17学部および大学院からなるタイ有数の総合大学
である。時代の流れからか、本年度から独立法人化されている。敷地は900ヘクタール(東京ドーム 193
個分)の広大な面積を有し、生活の基盤となるすべての施設が整っている。大学は、2200名を超える教員、
8500名のサポータースタッフ、4万人の学生が在籍する、いわゆるマンモス大学である。

医学部は福岡大学医学部と同じ1972年に創立され、医療に関係する学部としては医学部の他に、歯学部、看護学部、薬学部、Associated Medical Science (臨床検査技師、理学療法士養成学部)、公衆衛生学部を有している。

日本との国際交流においては、三重大学、山形大学、熊本大学、弘前大学、島根大学などと大学間協定を、広島大学や岡山大学などと医学部間協定を結んでいる。また医学部学生や研修医の初期教育に関しては三重大学、愛知医大などの東海地区の大学と提携をしており、日本人学生や研修医の受け入れには実績がある。また、地域的に感染症の患者が多く、バイオバンクを有する熱帯医学研究センター、肝吸虫・胆管細胞癌研究センター、新興感染症診断研究センターなどを有しており、これらに関する研究レベルは高く、WHO や NIH などを通して、欧米の研究者とも世界レベルでの共同研究が盛んに行われている。



これまでの経緯と調印式

(サイニングセレモニー)

コンケン大学医学部招聘教授である名和行文教授(元宮崎大学副学長)のご紹介により、2011年から鈴宮淳司先生(元福岡大学医学部准教授、現島根大学医学部附属病院腫瘍センター/腫瘍・血液内科学教授)をリーダーとする有志グループによる訪問交流が開始された。鈴宮先生と親交のある日本全国の大学の有志の面々がコンケン大学で開かれるセミナーに参加し、その後も毎年コンケン大学で学術交流が継続されている。福岡大学

医学部からも、2013年には鍋島一樹教授(病理学)、2014年は自見至郎講師(病態構造系総研)らが参加した。その中で、福岡大学との国際交流事業の話が持ち上がり、その後、福岡大学医学部とコンケン大学医学部間の国際交流のための協定合意文書が作成された。今回、その合意文書の調印式出席のため、コンケン大学医学部を訪れ、2015年11月2日に朔啓二郎福岡大学医学部長と Charnchai Panthongviriyakul コンケン大学医学部長との間でサイニングセレモニーが行われた。

両大学医学部間での合意文書(MOU: Memory of Understanding)には以下の内容が含まれている。

- a. 研究情報交換
- b. 両校における学術的プログラムの確立
- c. 学生交換・交流
- d. 教員の交換・交流
- e. 事務職などの非アカデミック職員の交換・交流
- f. 両校における共通教育の実践

サイニングセレモニーでは、両学部長自らがDVDやスライドを用い、自身の大学の紹介を行い、両大学の現状について相互理解を深めることができた。さらに、質疑応答などを交えた後、極めて良い雰囲気の中で終了した。両学部長による署名された合意文書交換後、福岡大学およびコンケン大学の出席者による写真撮影が行われた。

サイニングセレモニー終了後、大学近くの大きな池に隣接する近代的なタイレストランまで送迎車で移動、昼食後、記念撮影を行った。学生も数名参加した(左奥)。



コンケン大学・同大学病院見学

医学部図書館：図書館員による図書館の説明。24時間使用可能な部屋がある。当日、近くの高校生が勉強に来ていて、分からないところがある場合、そこにいる大学生が自発的に教えるらしい。



病院前の広場にて
(コンケン大学病院を創設した国王と王妃の銅像前)



病院の中庭

病棟：各病棟の看護師による説明。一般病室にはドアがない。

僧侶特別病棟(最上階)：タイにおける僧侶は特別の存在で、僧侶専用の病棟および治療はすべて寄付で賄われている。一般の病棟に比べ、作りがよく、寺院のような大きな仏像なども設置されている。

胆管がん特別センター：タイ北東部では肝吸虫による感染症が多く、それが原因となり胆管細胞がんを発症する。同センターはタイでの同疾患の中心的治療施設となっている。



病棟内を飾るタイ式生け花



大学病院の新病棟

研究交流セミナー

13:00 ~ 15:30, Nov. 3, 2015

Nhong Waeng Meeting Room,
Faculty of Medicine, Khon Kaen University

以下のプログラムで研究交流セミナーは行われた。

セミナーの目的：

福岡大学とコンケン大学との共同研究のテーマを探るため、お互いがどのような研究を行っているかを知るため、第1回目のセミナーが行われた。

研究紹介：

コンケン大学からは、タイ東北部に特異的にみられる重篤な経過をたどる感染症“メリオイドシス”の疫学および治療法、ならびに将来的治療法についての研究発表が行われた。発表者は、Dr. Rasana Wongratanacheewin と Dr. Surasakdi Wongratanacheewin であった。発症菌である *B. Pseudomallei* はバイオセーフティレベル3に属する細菌で、土壌中に生息し、多くは傷口から感染すると考えられている。生体内では組織内・細胞内寄生することで生存し続け、感染後時間がたつてから再発するという特徴の説明を受けた。福岡大学からは、ATP レセプターである P2X7 の重要性に関する研究発表(薬学部医薬品情報学：右田啓介先生)、クレブシエラ肺炎菌の病原性に関する

研究発表(腫瘍・血液・感染症内科学:吉村芳修先生)、MRSA 感染症のバイオフィルムの重要性に関する研究発表(病態構造系総研:自見至郎先生)が行われた。

お互いの発表に対し、様々な質疑応答が交わされ、意義深い討議ができた。

終了後に、研究室を訪ね、研究方法などの説明を受けた。

将来的展望:

両大学間の研究紹介により、研究に用いた菌種は異なるものの抗菌薬非特異的な薬剤耐性の原因となるバイオフィルム形成菌であることから、今後両大学間の研究交流がバイオフィルムを中心とした研究で可能となることが期待できる。

発表風景



右田先生



吉村先生



自見先生



Prof. Saku's Commentary

福岡大学とコンケン大学の学部間交流事業が今回の調印式でスタートできた。引き続いて行われた第1回目の福岡大学とコンケン大学の研究セミナーから、今後、国際共同研究ができる可能性を強く感じた。セミナーに出席したコンケン大学の学生や、病院内で説明していただいた医療スタッフの英語能力の高さに驚かされた。セミナーでは学生たちの自らの疑問に対する臆しない姿勢と、外国人の我々に対してだけではなく、コンケン大学の先生方に対しても自分の意見を述べ、戦う積極性には目を見張るものがあった。インターナショナルに通用する人材の育成が進んでいる。タイ人の精神的支柱はタイ仏教である。両手を合わせる挨拶は大変安らぎを感じる。一方、タイ国内では日本のマンガやキャラクター、芸能などが広く、深く若者達の心を捉えている。若者たちは日本に対して憧れを持ち、友好的である。タイ特有の風土と文化に加え、若いエレルギーと独自性を持ったコンケン大学との学生交流や研究交流は、福岡大学の国際化にとって重要であると考え。今後、両大学が直接的に交流することにより、教育、医療、研究分野に今までなかった新たなアクションが生まれることが期待できる。